地域で縁をつなぐ駄菓子屋コミュニティ
－ソーシャル・キャピタル醸成の促進に向けて－

井上　侑

筆者は、社会的孤立の問題に関心を持ち、対策の手がかりとして、ソーシャル・キャピタル（以下 SC と呼ぶ）という考え方に注目した。SC は、地域の人と人を結ぶ目に見えない糸のように存在し、健康や教育など広い分野で機能する。だが、なかなか理解が進まないという現状もあり、SC を構築する仕組みに関して例を増やし、理解を深めていく段階にあるのではないかと感じている。

そこで、そのキーワードとして地域の居場所に注目し、SC 醸成の仕組みについて考えた。まず、地域の居場所を SC が醸成される場として位置づけ、その可能性について事例を通して確認した。その結果、小さくて弱い繋がりによる信頼が地域に広がる拠点となっていること・対等かつ開放的であること・斜めの関係による繋がりが築かれていること、の 3 つの特徴があることが共通点として見つかった。

このような特徴について考えた際に、駄菓子屋とそこにいるおばさんやおじさんの存在を思い浮かべた。駄菓子屋の歴史や役割を確認する中で、そこに存在していたコミュニティには、駄菓子を売ることとは別の付加価値があると考えた。そして、駄菓子屋に存在していたコミュニティの価値を見出し、地域の居場所づくりに活かすことができないかと考え、駄菓子屋の機能や役割を調査した。その結果、駄菓子屋の地味さ・曖昧さ・自由と気軽さという、居場所にある特徴を助力するような 3 つの特色が見られた。これを受けて、居場所の役割を意識した駄菓子屋のこれからの形として、公園の活用・自宅や空き家の活用・福祉施設との調和の 3 つの案を事例とともに提案している。

本研究で明らかになった駄菓子屋の居場所的機能や役割を通して、地域の文化に触れたり、地域の人と関わったりすることで、地域や住民との絆の糸が紡がれる拠点が形成されていくと考える。それは、SC という視点からも繋がりが醸成される仕組みとなり得るだろう。